大衆文學の傾向を如何に見るか

大衆文學は小乘文學

加藤武雄

▼文學は本來貴族的なものである。高踏的なものである――と說く人がある。私は此の說を採らない。さういふ一面のある事は認める。が、全稱肯定的に、すべての文學は貴族的のもの、高踏的のものといふのは明かに誤謬である。が、こんな事は、今更、呶々するほどの問題ではない。トルストイの藝術論は、しつこいまでに此の誤謬を指摘してゐる。

▼『通俗』は『低級』の同義語ではない。通俗小說といふ言葉に、侮蔑の意味を與へたのは、俗をいやしとするところの、所謂文人墨客趣味の餘弊である。近代の小說は、むしろ『俗』の精神から生れた。通俗なるが故に卑しいと考へるのは、甚だしい矛盾である。

▼この意味に於て『通俗』は決して文學の病ではない。通俗にして、はじめて、文學はその本事を示す事が出來ると云つても過言ではない。すくなくとも、さういふ性質、乃至さういふ種類の文學がある事は認めなければならぬ。否、さういふ性質、乃至種類の文學こそ、最も本統的な文學と云つてもいゝのである。

▼少なくとも、文學といふものを、他の、學問とか、政治とか、產業とか、社會人類の爲めのいとなみの一つとして見る時は、さういふ文學こそ、最もよき文學といはなければならない。

▼文學は、作者自身の爲めのものであると同時に、また、他のいとなみと同じく、社會の爲め人類の爲めのものでなければならない。自分が書き度いから書く。たゞ自分自身をさへたのしませればいゝといふ氣持で、自分以外の讀者などはまるで豫想せずに書く。さういふ文學もある。が、さういふものばかりが本當の文學で、さういふものでない文學は、皆第二義の文學であるといふ風に考へるのは明かに間違ひである。さういふ考へ方は、文學上の獨美主義で、所謂、琴棋書畫骨董趣味の餘弊である。文學は、作者自身のものでなければならぬと共に、また萬人に働きかけるものでなければならぬ。

▼『文章は經國の大業』といふ。文學もまた、對社會的の一つのいとなみと考へなければならない。

▼大衆文學の根據は、つまりそこにあるのである。娛樂の爲めの文學――といふと、藝術的に無價値なものに思はれる。しかし、娛樂は、何人にも必要なものである。米が必要であり、布が必要であると同じやうに、娛樂といふものも、人間の生活には必要である。この必要を充たすための文學は、藝術的價値は乏しからうとも、そこに社會的價値がある。對社會のいとなみとしての價値がある。今行はれてゐる大衆文學には、少なくともこの意味に於ての價値がある事は爭はれない。そして、この社會的價値も、また、藝術的價値の一部分をなしてゐるのでは無からうか？

▼大衆文學といふと、別の方面から見れば、一種の娛樂文學であるらしい。娛樂文學だから、藝術的價値がないときめて了うのは、妄斷でなければ速斷である。娛樂的要素で、藝術的要素とは、必ずしも相杆格するものではなく、寧ろ相助成する場合もあるのだから。

▼だが、それには、娛樂といふ言葉の內容を一應吟味して見る必要がある。その娛樂といふものが、非常に低級な、人間性を損ふやうなものである場合には、さういふ娛樂文學は、藝術的價値をもち得ないと共に、娛樂を與へるといふ事によつて贏ち得る社會的價値をもち得ないわけである。大衆文學の排す可きは、さういふ場合に於てゞある。

▼以上は抽象論である。いや、論といふにも足りない平凡な講說に過ぎないが、さて、以上の講說を、現下大衆文學の實際にあてはめて考へて見る。正直のところ、私は、所謂大衆文學といふものを、あまり讀んでゐないから、はつきりした事は云へないが、多くの中には、俗衆の弱點に媚びて、極めて低級な娛樂――本當の意味での娛樂とは云へないやうな、毒ある娛樂を强ひるやうな、さういつたものも少なくないと思ふ。『通俗』文學でない『媚俗』文學。さういふものも少なくないやうに思はれる。

▼大衆文學は、『通俗』文學である。決して『媚俗文學』であつてはならない。大衆文學は、文學の小乘である。しかも、大乘と云ひ小乘といふも佛陀の道は唯一つ。作家にして、その大慈悲心を享有する限り、所謂大衆文學も亦立派な文學であらねばならぬ。

大衆文學は天才文學である

平林初之輔

大衆は、その一人々々をとつて見ると、凡庸であります。それが集團になつても、たゞ雜然と集つたゞけでは所謂衆愚であつて、イプセンが言つたやうに『沒理性的』存在であります。けれども、その要求が、統制され、綜合されると、美事なシムフォニイを形づくります。それが一人の人格に具象化されたものが、最も正しい意味の天才であると私は思ひます。最も偉大なる科學的眞理や、哲學的思想や、宗教的教義と同じやうに、最も偉大なる文學作品は、天才の力によりて生み出されるものであり、この天才は、前述の意味に於いて大衆的だといへます。私は、この意味に於てのみ、所謂『大衆文學』に眞の價値を認めます。それは、大衆を構成してゐる個々人が、一部分づゝしかもつてゐないものを、天才は全體としてもつて居り、從つて、天才は、大衆の個人々々と共通なものをもつてゐながら、同時に、大衆の誰よりも以上のも